

「森銑三刈谷の会」だより No. 27

発行 2024/1/20 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@catch.ne.jp



森銑三編・中井左琴画「日本少年文庫第3輯『徳川家康』表紙、1920年、大道社発行(名古屋市蓬左文庫所蔵)

第27回 (2023/12/16) 「森銑三：日本少年文庫『徳川家康』(1920)を読む」参加12人 神谷 磨利子

刈谷市歴史博物館学芸員・山下智也氏から歴史学者の三鬼清一郎氏著『大御所 徳川家康』(2019年、中公新書)の中に森銑三の『徳川家康』についてのコラムがあることをお聞きした。森銑三は大道社の『帝国民』編集者時代(1918.12-1920.6)、「日本少年文庫」シリーズとして『渡邊崋山』『松本奎堂』『徳川家康』三篇を出している。このことは本会第14回『『帝国民』編集者時代の森銑三』(2022.10.15)の中でも取り上げた。『帝国民』(1920.3)掲載の「『日本少年文庫』の刊行に就いて」の中に郷里の偉人伝を執筆した事情が書かれていること、鈴木三重吉『赤い鳥』(1920.9)でも激賞されていること、勝尾金弥『森銑三と児童文学』にも詳しく書かれていることなどを取り上げて来た。そこで今回は、この会でも実際に森銑三の『徳川家康』を読んでみようということになった。

その前に勝尾金弥『朝日新聞』名古屋版(1987.10.30)記事、『森銑三著作集』愛蔵版第5巻月報(1989.2)などを読み、勝尾氏が名古屋市蓬左文庫所蔵の「日本少年文庫」三冊を目にするまでのいきさつを押さえた。

森銑三の『徳川家康』は、小さい時は運が悪く、辛い目にばかり遭った竹千代の成長についてエピソードを交えて語り、姉川・三方が原・長篠・小牧・関ヶ原の五大戦争そして大阪(マ、大坂)の陣までの合戦における家康の対応を描いている。「豊臣を滅ぼすことは家康の心からではなく、いろいろの事行き違いから勢あゝなってしまうので」「家康は決してそんな無慈悲な人ではなかったのです」というまとめが概ね銑三が子どもたちに語る家康の評価である。参加者からは「信長、秀吉のどれも悪者になっていませんね。エピソードが多く、(森銑三編)となっている意味が分かります」(長嶋秀雄)、「日本少年文庫は総ルビで当時の子どもたちが読みやすかったと思う」(塚本吉英)、「小学生になった気分で、次は誰?どこまで読む?と真剣になって、頭に入りやす

かった」(神谷明子、神谷美恵子)と2時間があったという間に過ぎた。

正木敦子さんからは家康の母・お大(於大)の方のエピソードは小さい頃自身の母から聞いたとの話もあった。銑三の家からごく近い所にある椎の木屋敷跡は於大の方が岡崎の松平広忠から離縁された後に住んだ跡地と言われる。銑三にとって親しいエピソードだったと言える。

平易な文章で血と肉のある歴史物語

飯田芳子

27回は森銑三の『徳川家康』を読む会でした。A3両面にわたる資料では、森銑三が『日本少年文庫』刊行に就いてと題し、その主旨として平易な文章で血と肉のある(生き生きとした)歴史物語を届けたいと書いています。まさにその通りの内容でした。当時の4・5年生がこれを読むことにより歴史に興味を抱きより深く知りたいと考える端緒として申し分のない要素を備えた佳作(作品)であると感じました。また、懐かしさを想起させる貴重な資料を以て読む機会を与えられたことを、うれしく思い感激しています。

高須鉦吉先生の信頼

河橋育実

三河全国高等小学校長会から、三河の少年の読物として三河の偉人伝の執筆を依頼されたことに、そうだったのか、すごいな、銑三さんは高須鉦吉先生(亀城尋常高等小学校校長)に信頼されていたんだなと思いました。

森(1920)『徳川家康』と「森銑三の三冊」

鈴木哲

会には出られませんでした。森(1920)『徳川家康』大道社、興味深く読みました。「家康は決してそんな無慈悲の人ではなかった」は、NHK大河ドラマ「どうする家康」と共通するものを感じます。『新愛知』新聞連載「偉人暦」徳川家康(1924/4/17)では「胆汁質の家康は日本国民から嫌われている」として、森25歳から29歳の評価の違いがあります。『渡邊崋山』『松本奎堂』(1920)が森嗜好であるのに対し、『徳川家康』は三河全国高等小学校長会意向に沿ったのでしょうか。勝尾金弥「児童文学宝探し」(朝日名古屋1987/10/30:5)で執筆から「数日を出ずして反応があり、名古屋蓬左文庫内(略)にあることが判明した」(森銑三著作集愛蔵版5(1989)月報)とあります。愛知県立大学にて「森銑三の三冊」につき手紙を出したのは(思い違いがなければ)35歳の私です。

予定

28:2024/1/20(土) 神谷磨利子「森銑三『おらんだ正月』
—「おらんだ正月」って何?」

29:2024/2/17(土) 神谷磨利子「森銑三と書誌学—「埴検校と名古屋の学者達」(『書誌』1926.12)を読む」